永久平和を願って 次世代に戦争体験を語り継ぎたい

私の戦争体験談 3

秘書広報課 ☎24-8801

高松空襲

―七月四日 惨禍を語り平和を祈る―

前塩屋町　児玉　一枝さん

昭和二十年七月四日未明、米空軍B29の無差別爆撃によって、四国の玄関口高松は、市街地の大半が灰燼に帰した。今から七十年前の事である。

私は、その時、高松赤十字病院の救護看護婦養成所へ四月に入所したばかりであった。

当時高松赤十字病院は、呉海軍病院の分院として海軍の管理下にあり、海軍の傷病兵を収容すると共に、外来と一病棟のみに一般患者を収容し診療を行っていた。

すでに戦局は悪化しており、病院では空爆に曝された場合を想定して綿密な対策を立て、職員や看護婦一人ひとりにその方策を周知徹底し、訓練が行われていた。

魔の七月四日、空襲警報発令と同時に始まった空爆は想像を絶するものであった。

その時私は、前日に亡くなった軍患者さんの通夜の当番で、宿舎から霊安室へと急いでいた。すると「そこの看護婦、早く防空壕へ入れ」と防空壕の上に仁王立ちの白衣の男性の声がした。急ぎ宿舎の防空壕に飛び込むと、すでに数人が避難して居たが、私が入ると同時に宿舎に焼夷弾が命中したのであろうか、物凄い爆発音と共に火炎と熱風が、壕の内に舞い込んだ。すると再び「早く運動場へ逃げよ」との声、急ぎ壕を出てすでに炎に包まれていた病棟の廊下を駆け抜けて運動場へ。その時担架を担いだ二年生と遭遇、少しでも手助けになればと一緒に担ぎ、運動場を経て西門から空き地へ出た。避難指示をしてくれた白衣の男性が石井兵曹長であったと後で知った。

その間もB29の空爆は衰えぬばかりか、連なって急降下しては焼夷弾を投下して行く。

その数、実に百十六機の編隊であったと。

その都度三人で患者さんを庇いながら身を伏せていたが、弾にあたかも自分の頭や背中を狙い撃ちされている様な非常な恐怖であった。周囲の民家からも次々と火の手が上がり、大きい爆発音と共に2階建ての高い建物の棟が落ちて、真昼の様に照らし出される。と、それを目標に又B29が急降下し、焼夷弾が投下される。その弾は自分達の周りにも落下し炸裂する。その様は正に生き地獄であった。

二時間近い長い空爆が終わり夜が明けてみると、当時四国最大の規模と設備を誇った四千四百坪の病舎は跡型も無く、鉄筋コンクリート建の研究棟一棟だけが外郭のみを残し、一万一千坪の敷地は、ただ黒々と瓦礫の山と化していたのである。

その様な中、全員が一致し、分散避難していた患者さんを助け出し空き地に誘導した。

幸いにも、一人の怪我人もなかったのは、平素の訓練の賜物であったのだろう。

しかし、養成所一年の万代幸さんが肩に、後藤さんが膝に焼夷弾の直撃を受け負傷された。患者さんを身を以って守った為である。

その後、石井兵曹長、山下婦長の指揮の下、順次隊列を整え昭和町の海軍人事部へ。そこで地域の婦人会の方々の炊き出しの「おにぎり」をいただき、再び炎天下を徒歩で鬼無駅まで担送護送した（高松駅は空爆で機能を失っていた）。

母とつないでいた手が離ればなれに

中新町のロータリーの水槽は地獄絵に

鬼無からは汽車で琴平まで移動し、琴平では敷島館を本部に六か所の旅館に分宿避難した。私は敷島館でお世話になったが、その時の女将さんのお心のこもったおもてなしは、本当にありがたく思い出に残るものとなった。

その夜も何回となく警報が発令され、その都度山際まで避難したので、万代さん達が、担架のまま玄関で休んでいた痛々しい姿は、今なお心に焼き付いている。

そして、私達一年生は翌朝自宅待機を命ぜられて一時帰宅したが、その後被弾した万代さんはガス壊疽を併発し入院先の岩崎病院で亡くなられた。未だ数え年十五才（現在の中学三年生）の若さであった。軍では彼女の健気な活躍を称え、その死を悼み海軍葬を以って送ったが、余りにも悲しく痛ましい限りであった。

この空襲で尊い命を落とされた方は、千三百五十九名にも上るという。心からご冥福をお祈り申し上げたい。

また、聖戦という名の下で戦った先の戦が如何に残酷悲惨であったか、その様は七十年を経た今も私の脳裏から消えることはない。

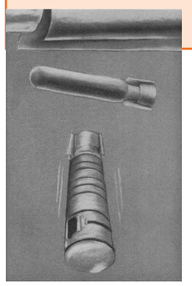
そして、その惨禍を語り継ぐ事も、生き永らえた者の責務であろうと、その有様と思いを綴り、永久の平和を心から願い、祈り続けたいと切に思うのである。

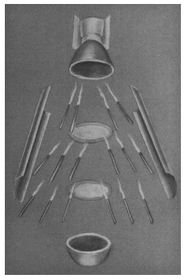
（平成二十七年九月記）

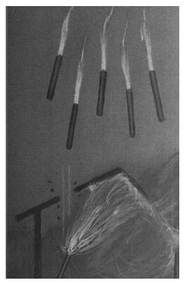
絵：高松空襲を子どもたちに伝える会発行「えほん高松空襲」より

B29（大型爆撃機）の焼夷弾

当時、木造家屋が多い日本の都市攻撃には「対象を燃やす」ことを目的とした焼夷弾が使われました。B29から焼夷剤を装填した子爆弾を収納しているカプセルのような爆弾が投下され、落下途中で分解して、中から多数の子爆弾が飛び出します。地面に激突すると、爆発して、燃えながら焼夷剤を四方に飛び散らす爆弾です。







平和のために語り継ぐ「戦争体験記」などを募集します

秘書広報課 ☎24-8801

昨年、戦後70年の節目の年にあわせて、二度と戦争を繰り返さないために、広報丸亀で「戦争体験記」を募集しました。お寄せいただいた体験談を掲載した11月号をご覧になった皆さんから、寄稿や問い合わせを多くいただいています。

秘書広報課では、戦争を知らない世代に貴重な体験を語り継ぐため、引き続き体験記などを募集します。

内　容

戦争体験や戦争中の生活を伝える体験談400字～最大2000字（原稿用紙１～5枚）・資料など（使用後返却）

応募方法など

住所、氏名、年齢、電話番号を記入して郵送か持参またはＥメールで秘書広報課まで。順次広報丸亀などで紹介させていただきます。

送付・問い合わせ

〒763-8501丸亀市大手町二丁目3番1号
秘書広報課 ☎24-8801
hishokoho-k@city.marugame.lg.jp

新企画　市民ギャラリー作品募集

「広報丸亀」で個展を開いてみませんか

- 掲　　載　「広報丸亀」1/2ページ程度 順次掲載
- 作品及び点数　丸亀市に縁のある絵画、書、版画、写真、立体的な作品は写真 2～3点以内（応相談）
- 作品の大きさ　概ねＢ５判～Ａ３判
- 問い合わせ・申し込み　秘書広報課 ☎24-8801